

日本イギリス哲学会 第58回 関西部会例会

日 時：2018年7月14日（土）13：00～17：50

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13：00～14：30（討論を含む）

報 告 者：武田 智紀（京都大学大学院 経済学研究科 修士課程）

題 目：ジョージ・バークリーの『受動的服従』に対する思想史的考察

報 告 2：14：40～16：10（討論を含む）

報 告 者：中元 洸太（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程）

題 目：リードの信念の統治とパースの探究の論理の相違について

報 告 3：16：20～17：50（討論を含む）

報 告 者：杉田 望（京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程）

題 目：『悪魔の政治史』からみるダニエル・デフォーの悪魔論

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、今年度12月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

伊勢 俊彦（立命館大学、[tit03611\[at\]lt.ritsumei.ac.jp](mailto:tit03611@lt.ritsumei.ac.jp)）

竹澤 祐丈（京都大学、[Takezawa\[at\]econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp)）

*[at]を@に直して下さい

<会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



＜日本イギリス哲学会 第58回関西西部会例会 報告要旨＞

報告 1：ジョージ・バークリーの『受動的服従』に対する思想史的考察

武田 智紀

本報告では、ジョージ・バークリーが1712年に公刊した『受動的服従』を分析する。

本著作でバークリーは、統治者に対する一切の抵抗を禁ずる受動的服従の教義を主張している。したがって本著作は、抵抗権をその一部とするジョン・ロックの政治理論に対する批判的著作として捉えられることが多い。

しかしながら1709年に、バークリーがロックの『統治二論』を友人に推薦していることから、先行研究が異なる解釈を提示している。すなわち、例えば Connolly (2000) によれば、『統治二論』を推薦したにもかかわらず、『受動的服従』において契約を根拠にした服従義務の制限を否定したバークリーは矛盾している。あるいは角田 (1992) によれば、バークリーは、道徳的義務としての服従を要請することで無政府状態を克服した後、『統治二論』でロックが述べる良き統治によって専制を防ぐことを企図していた。

そこで本報告では、『受動的服従』を『統治二論』との関係を念頭に置きながら分析することで、上述の先行研究の解釈に対する検討を行いたいと考えている。

(京都大学大学院 経済学研究科 修士課程)

報告 2：リードの信念の統治とパースの探究の論理の相違について

中元 洸太

近年ではトマス・リードの思想とプラグマティズムの近接性を論ずる研究が散見される。報告者はこの大まかな方向性に反対するものではない。しかしこの線の多くの研究はプラグマティストとの同質性ばかりを強調しているきらいがある。本報告では批判的常識主義を展開したパースをリードの議論と並列することで、特に両者が可謬主義を受容していたことを念頭に置きつつ両者の議論の相違を検討する。

パースは「プラグマティズムとは何か」のなかで、プラグマティズムの前提条件となる学説として三つの主張をしている。第一に、私たちはすでに有している先入見を現状疑いえない信念として受け入れることからスタートしなくてはならないこと。第二に、知識を形而上学的真理という観点からではなく心理的な信念という観点から考えること。第三に、私たちは疑いによって信念を突き崩され、新たな信念を得るために探究を行なうこと。第一・第二の点についてリードはパースと大まかに軌を一にするようにみえる。

ところが第三の点、可謬主義をどのように機能させるかについて、リードとパースは異なる立場を採っているようにみえる。パースは探究者が積極的に疑いに身をおくよう自らを差し向けることで、科学的仮説のみならず先入見の改訂を推奨する。これに対しリードも常識原理の改訂こそ認めているものの、基本的には「常識原理がそのうえに構築された

科学的信念の裁定者となる」という、パースとは異なる青写真を描いているようにみえる。パースが自らの批判的常識主義をスコットランド常識学派と区別するうえで疑いの重視を挙げたのは、このような事情があったからだろう。報告の後半では特に、リードがなぜこのような立場を採用しているのかを考察することでパースとの違いを指摘したい。

(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)

報告 3 : 『悪魔の政治史』からみるダニエル・デフォーの悪魔論

杉田 望

ダニエル・デフォーは『ロビンソン・クルーソー』の作者として広く知られており、それ以外にも経済思想家、政治思想家、ジャーナリストなど、幅広い分野で活動していた。デフォーの関心は、オカルト的な分野にも及んでおり、晩年に『悪魔の政治史』(1726年)、『魔術体系』(1726年)、『幽霊論』(1727年)という作品を発表している。これらが発表された当時の状況としては、ヨーロッパで魔女や悪魔に対する信憑性が揺らぎ、16～17世紀に猛威を振るった魔女迫害の勢いも衰えていた時期であった。そのような状況の中、デフォーはこの作品を通じていかなる魔女観・悪魔観を提示したのだろうか、またそれにはどのような意図があったのだろうか。本報告では、将来的に超自然的存在への議論をデフォーの思想のうちに位置づける足がかりとして、デフォーの晩年のオカルト的作品のうち、最初に出された『悪魔の政治史』の分析を行う。本作品からデフォーの超自然的な存在に対する認識を明らかにし、彼がそうした存在にどのような位置づけを与えていたのかを検討する。

(京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程)